

女もすなる手芸というものを、男もしてみんとするなり



アート系
手芸男子
特集



ニットは素材と触感、その構築物として無限の組み合わせがある

Knitting is my passion. And it has more or less been that since I knitted my cousin's Barbie doll a sweater when I was 10 or 12. I cannot remember if I learned the basics at school or from my mother, but I do recall my mother helping me reading and understanding the Barbie sweater pattern. During the following years I knitted the Barbie doll more garments and other small things. In 2001 I spent 4 months at a Folk High School and there for the first time I tried designing, playing with the yarn and it's possibilities. Ever since knitting has grown in to a complete full time passion for me.

I have worked in yarn shops. I have attended the Danish School of Design and I have designed knitting patterns for Danish knitting magazines, a website for young people at

Danish National Televisions homepage and a Danish yarn brand. In the picture I am knitting one of my most recent designs, the upperpart of my friends wedding dress.

The thing that attracts me about knitting is the immense possibilities you get from the craft to create structures and textures. Structures from combining different kinds of stitches, colours, types of yarn and of materials. The textures come from the different material types (cotton, wool, mohair etc.) but also from the way you combine the materials and the way the yarn has been spun and plied. The yarns' own texture gives me so much inspiration to how it can be used for creating a knitted piece.

Everywhere I go I see possible knitted textures. Knitting is a huge part of my life. It is my passion.

英国ロンドン、ビクトリア・アルバート美術館の中庭。7月の眩しい陽射し、そのバイオレットの紫陽花のもとで編物をしていったのが彼、Vithard Villumsen さんでした。

まるでお伽話の本を開いたようなワンシーン…。そこで彼は忙しそうに編み針を動かしていました。その時、彼が身に付けていたシヨールに目が釘付けに、「それ自分で編んだの？ シェットランド？ それハップスよねえ…いいわねー！」

「君のそれもシェットランドレース…だよな？ すごく細い糸だ、誰が紡いだの？」

私はその時、田村直子さんのスピンドルで紡いだ水色のシェットランドレースをしていました。吸い寄せられるように互いのシヨールに魅入られてしまったのです。

そしてその時撮らせもらった写真がこれ、今回の表紙です。

彼の笑顔、そのたたずまい。編物をする楽しさが溢れています。

こんな笑顔で話しかけられた日には、みんなニットの魔法にかかってしまいます。そう、女子だけでなく、男子もね。(本出)



ニットは僕の“情熱”そのものです

Knitting is my Passion

Vithard Villumsen

アート系
手芸男子
特集

それはたしか10才か12才の頃、従妹のバービー人形のセーターを編んだのが始まりです。小学生のクラスで習ったのか、母親から習ったのか、記憶は定かではないけれど、その頃はバービー人形のセーターの製図を読むときも、いつもお母さんに手伝ってもらったことを覚えています。それからしばらく、僕はバービー人形の着る物だけじゃなく、その小物にいたるまで、色んなものを編みました。

2001年に僕は4か月間工芸高等学校に通いました。そこではじめて糸のデザインをしたり、とにかく糸と「遊ぶ」ことを経験しました。その後、毛糸屋さんで働いたり、デンマーク・デザイン学校に通っていて、「デンマークの編物雑誌」にニットデザインを掲載したり、若者向けデンマーク国営放送のウェブページに、デンマークの糸というブランドのデザインをしています。

表紙の写真で、僕が身につけているシヨールはもともと最近の作品の一つ。そして編んでいるのは僕の友達のエディングドレスの上部分になります。

僕がニットの何に魅かれるのか

というところ、その構築物としても、テクスチャー（触感）としても、無限の組み合わせの可能性があるところにあります。すなわち編み方、色、糸のタイプ、素材。たとえばコットン、羊毛、モヘヤ等…素材の違いによって、その手触りが違ってくるだけではなく、素材のブレンド（混毛）や、糸の太さ細さ撚りかけん、その糸のプライ（合糸する）をどうするかによって、糸の風合いからどんなものが作れるのか、どんな編み地のピースが展開できるかは無限に広がります。それを考えるだけで、インスピレーションがかきたてられます。

僕はどこにいても、何を見ても、いつも編物の可能性を考えています。編物は僕の人生の大きな部分を占めています。それはまさに僕の情熱そのものなのです。

